

長い内戦の中で途絶えかけていた、カンボジアの伝統織物の復興に従事している日本人の方がいます。現地 NGO として IKTT(クメール伝統織物研究所: Institute for Khmer Traditional Textiles)を設立した、森本喜久男氏です。このプロジェクトは、「伝統の森」再生計画と呼ばれています。この度カンボジアで、ご本人に、計画が実施されている村を案内していただく機会がありました。

村は、アンコール・ワットのあるシェムリアップの町から北へ約 30km、ピアックスナエンと呼ばれる地域にあります。当初約 5 ヘクタールの土地取得から始まったものが、今では約 23 ヘクタールとなりました。伝統織物を復興させるためには、まずその技術を持った人の発掘に始まり、織物素材を確保するための循環可能な自然環境の再生にも着手しなければなりません。そして、それまでベトナムからの輸入生糸を使っていたのを、養蚕を行うことにより、糸の生産から織物の加工まで、一貫してこの村で行えるようになりました。

初めは 5 名のスタッフから始まったこの IKTT も、現在では約 400 人の研修生を抱えています。研修生はこの村に住み、男性は畑作業や土木作業、女性は織物をしています。この「伝統の森」再生プロジェクトは、研修による必要な人材育成と共に、新たな雇用の機会創出、とりわけ貧困層の女性や社会的弱者とされる障害を持った人、就学機会がなく読み書きができない人、両親や父親がいない、あるいは身寄りのない年配者などへ就労機会を提供してきました。生活の糧を得た人々は、仕事へのモチベーションも高くなり、この村で生産される絹織物は世界でも指折りの高品質のものだと言われています。

村の中で、家庭をつくるケースも出てきていますが、母親は職場に子供を同伴させることができます。子供を家に置いておくと気になってしまい、かえって仕事に集中できなくなってしまうことを避けるためです。そして、子供が母親の仕事を近くで見ることにより、伝統織物の技術が継承されていくのです。

村の中では、野菜を有機栽培しており、また染物や織物のための植林や土作りが行われ、この「伝統の森」事業により、「伝統文化の復興」「自然環境の再生」「経済復興」という、まさに持続可能な理想的な村ができていることを感じました。

森本氏が、「“伝統”は守るものではなく、創るものだ」とおっしゃったのが印象的でした。先代からの伝承を受け継ぎながらも、世の中の変化に対応し、新たな価値を生み出していくことは、企業にとっても重要です。人を育て、環境を整え、伝承していく——持続可能な企業づくりにも、まさに同じことが言えるのではないのでしょうか。